

〈書評〉

伊藤秋仁、住田育法、富野幹雄 共著

『ブラジル国家の形成—その歴史・民族・政治—』

晃洋書房 2015年

日本貿易振興機構 二宮康史

1. はじめに

本書は長年ブラジル地域を専門としてきた研究者が、ブラジル国家の形成過程を歴史的、社会的な視点から読み解いた専門書である。ブラジルは2003年のルーラ政権発足以降の持続的な経済成長の実現に加え、2014年のサッカーW杯、2016年のリオオリンピック・パラリンピックの開催地となることで世界の注目を浴びた。その状況を見て、「新しいブラジル」に関する多くの研究が発表されるなか、共著者らは、「ブラジル社会の本質はこれまでとそれほど変わっていないようにも見える」と主張する。その根底にあるのは、今も根深い社会的・経済的不平等の存在であり、それは移民・奴隷制に起源をもつ人種の階層に起因するとの立場をとっている。

近年のブラジルは、1990年代にインフレ撲滅とマクロ経済安定化に向け基礎を作ったカルドゾ政権、その土台をもとに2003年以降、社会的格差の是正に取り組みつつ経済成長を実現しようとしたルーラ政権、そしてその路線を引き継ぎ、さらなる発展を目指そうとした2011年以降のルセフ政権という流れで国家運営がみられた。特にルーラ政権期では中間所得層の拡大、つまりは貧富の格差縮小を促し、ブラジルが歴史的に抱えてきた社会的格差問題の解決に向け大きく前進したように見られた。しかしこれまでの政権が直面してきた人種の階層による経済格差・社会的不平等の根本を振り返れば、1500年のポルトガル人のブラジルへの到達で始まった植民地時代、19世紀に本格化した外国人移民の導入、さらにヴァルガス大統領の登場以降に進んだ近代国家の形成といった、本書でテーマとする歴史に根差していることは間違いないだろう。本書はこのような歴史的・社会的背景をもとに、今のブラジルの問題点を指摘している。

2. 各章の要約

本書は二部構成となっており、第Ⅰ部を歴史編（第1章、第2章）、第Ⅱ部を現代編（第3章、第4章）としてまとめている。ここでは評者なりに内容を要約したい。

まず第1章では、1500年のポルトガル人によるブラジル到達から第一次共和制時代（1889－1930年）までの歴史を振り返る。ポルトガルは大航海時代にインド航路の開拓に成功、それと時期を同じくしてブラジルを「発見」した。当初は金や銀などのめぼしい商材を見つけられなかった新大陸の開発をポルトガル政府は民間にゆだね、カピタニア制が導入された。同制度は後の大土地所有制の基礎となった。その後、ブラジル北東部で砂糖産業が勃興する。欧州市場で東洋の香料に並ぶ利潤をポルトガルにもたらした砂糖生産の労働力は当初、奴隷化した先住民が充てられたが、やがてアフリカから黒人奴隷が導入される。サトウキビの栽培から砂糖の精製までを行う農場はエンジェニョと呼ばれ、ここでは農場主を頂点とする家父長制の社会が築かれた。

17世紀末にミナス・ジェライス州で金鉱が発見されると、農場に縛られない自由な労働力が集まり、流動性の高い社会を生み出した。金が生み出す利益は、金鉱を取り巻く社会にも波及し、食料品を中心とする消費財に対する国内市場を形成した。砂糖生産や金の採掘、その周辺での農業・牧畜業などが活発になるにつれ、多くが混血人であるブラジル生まれの者たちでも富を蓄積するようになる。彼らはポルトガルがブラジルに対して重商主義的な支配を強めると対抗意識が生まれ、土着主義思想と独立運動が各地で見られるようになる。

19世紀初めにナポレオンが率いるフランスの侵攻により、ポルトガル王室はブラジルへの移転を余儀なくされた。これにより事実上、ブラジルの独立は果たされたものの、政治の中心はポルトガルの貴族らに掌握され、ブラジル生まれの者は疎外された。1814年にポルトガルはイギリス軍の支援を受けてフランス軍を駆逐したことで、当時の国王ジョアン6世は1821年にポルトガルへ帰国を果たす。ペドロ王子は摂政に任命されブラジルに残ったが、本国への帰国を拒否し1822年にブラジル帝国の初代皇帝ペドロ一世となり、徐々に国家としての基盤を固めた。

19世紀に入るとブラジルでコーヒー栽培が興隆する。広大な土地と奴隷の労働力に立脚し、単一の商品作物のプランテーションを伝統的に行ってきたブラジルにとって、コーヒーはまさに好個の作物であった。コーヒー生産および輸出の

拡大はブラジルに富をもたらし、鉄道などのインフラ整備が進んだ。一方で労働力として中心的な役割を担ってきた奴隷制度は、国際的な圧力により奴隷貿易が禁止されると 1888 年に廃止される。同年は、ブラジルの発展史において、農村の大農場を中心とした家父長的・伝統的社会から都市の活動を基礎とした合理的でコスモポリタンの社会へと変革がなされ始めたといえる。

奴隷制の廃止により、自由労働者である外国移民の受け入れが本格化する。1880 年代、ブラジルの多くの指導者は、ほかの地域からの移住者よりも知的にも技術の熟練度においても優ると考え、ヨーロッパから白人移住者の導入に努力を傾注し、彼らはブラジル経済の生産を担う主要な労働者となった。その一方でかなりの割合の黒人解放奴隷は、失業や不完全就業の状態に追い込まれ、貧民のグループを形成した。

1889 年に第一次共和制に移行すると、コーヒー生産州であるサンパウロ州と畜産州のミナス・ジェライス州の出身者が相互に大統領を送り出す、いわゆる「カフェ・コン・レイテ」体制が成立する。サンパウロ州の発展はコーヒー生産の興隆のみにとどまらず、連邦共和制への移行により政治・経済の地方分権が確立したことが主因の一つであった。特にサンパウロ州では労働力として多くの移民を受け入れたが、それは農業部門に向かうだけでなく、都市部に留まり、工業・商業活動に従事した。

本章の最後に、人種問題に触れている。歴史家や社会学者は「ブラジルの奴隷制度は穏やかなものであったから、奴隷は主人から人道的な扱いを受けてきた」としているが、その考察には同意できない点が多々あった。奴隷の受けた身体的、社会的な現実には過酷で残酷なものであったからだ。温情的な奴隷制度という主張は、今日でもブラジルにおける人種差別を隠蔽している「人種民主主義」神話を補強する役割を果たした。また、ブラジルでは白人と黒人の間に、それらの混血人であるいくつかの人種タイプが存在する。この混血人の存在は、人種の混交が相当進行している証拠であるだけでなく、「人種民主主義」の存在の証と主張されることが多いものの、半面で偏見を生み出していることも否めない。その偏見とは、皮膚の色に関して白に近ければ近いほど良いという先入観であり、この見解があらゆる社会的な慣習の基礎になっている。今日、ブラジルにおける黒人と混血人の置かれている地位は明らかに社会の主流から疎外され、周辺部に追いやられていると表現できる。

第 2 章ではブラジルの外国人移民がテーマである。ブラジルは 1822 年に独立

して以降、広大な未開拓地を利用するためにも、外国人入植者を積極的に導入するようになる。19世紀前半の入植は、王室による未開拓地の譲渡と、同地に外国人が家族単位で入植する小土地所有制を基本とした。

19世紀前半の外国人移民の動きを概観すれば、1824年～30年にブラジル南部に入植したドイツ人の流れが第一期であった。入植は当初、帝国政府により企画されたものであったが、入念に計画されたわけではなく、総じて入植地での生活環境も劣悪であった。当時のドイツ人の移住先はアメリカ合衆国もあり、気候・風土面だけでなく宗教の面でも合衆国が好まれ、移民数でブラジルを圧倒的に上回った。

ドイツ人と入れ替わるように入植したのはイタリア人であった。その主な入植地は南部に集中したが、19世紀後半になるとコーヒー生産が盛んなサンパウロ州の農場などで移民導入が積極的に行われ、その主要な地位をイタリア移民が占めた。イタリア移民は、白人であることと、ブラジルの基盤であるラテン的な文化とカトリック信仰を共有していること、並びに言語の類似性から、ブラジル社会や文化への順応に大きな問題を生じることはなかった。しかし農場での不自由な労働環境に不満を抱く移民も多く、農村部での生活に見切りをつけ、コーヒー景気を背景に発展を続けていたサンパウロ州都に向かい、プロレタリアートの中心を構成した。

1817年～1947年までの国籍別外国人移住者数を見ると、イタリア、ポルトガルに次いで多いのがスペイン人移民である。1902年にイタリア政府はブラジルへの移民の生活の惨状が伝わると、補助金によるブラジル渡航を禁止した。そこで移民会社が目を付けたのはポルトガルとスペインからの移住者であった。これらのエージェントは、「渡航費無料」をうたい文句に、ブラジルへの移住を促した。スペイン人移民は、ポルトガルと地理的・歴史的に密接な関係にあり、言語・文化における類似性が非常に強かったために、ポルトガル人と同様に、ホスト社会に自然に溶け込むことができたと考えられる。

日本人のブラジルへの移民は1908年に始まった。当初の日本人移民は農業雇用労働者であり、サンパウロ州政府より渡航費の補助を受け、同州内のコーヒー農場で就労し賃金を得る契約を交わしていた。人種的に異質で、宗教や文化が異なるアジア人はブラジルにとって決して望ましい移民ではなかったが、ヨーロッパからの移民流入が滞ると日本人移民に依存するようになった。日本人移民は1925年～34年の10年間で最盛期であり、約12万5,000人がこの時期に移住した。言語や文化、人種面で異なる日本人移民は、主として農業分野で活躍した

が、日本人移民の子弟は教育を足掛かりにブラジル社会で上昇を図った。

第3章ではヴァルガス登場からルセフ政権までの現代を解説している。リオ・グランデ・ド・スル州出身のヴァルガスは、国際的には1929年の世界恐慌によるコーヒー価格の暴落、国内的には大地主のコーヒー農園主と牧畜業者を中心とする寡頭支配体制に対する反発を背景に、軍部の青年将校や新しい中産階級、労働者階級の支持を得て革命を起こし大統領の地位に就いた。ここでは、この革命の中から新しいブラジルが誕生し、続くヴァルガス独裁体制を通じて統一的ブラジル国家が建設されたとする立場をとり、ヴァルガス革命をブラジル近代史における一大転機とみなす。

ヴァルガス独裁体制の特徴の一つにナショナリズムの高揚がある。その内容は、革命による独裁体制の確立によって国家の統一を推し進め、表面上は民衆の政治参加を強調し、国民共通の意識としての「ブラジリダデ」、すなわちブラジルの民族中心主義の政策を行うことであった。いわば、権威主義的な独裁体制の樹立と民衆のブラジル意識の向上を目指す運動とが、未分化の形で展開されたのである。

ここで人種問題に触れる。1930年代にブラジルを訪れた外国人研究者ピアソンやバイアの社会学者アゼヴェドは、ブラジルでは階級の不平等が、人種あるいは肌の色よりも日常の社会的な関係において、一層深い影響を行使しているという仮説を表明している。これらの学者は人種的なステレオタイプと偏見が存在することは認めるが、それらを差別の源であるとはみなさなかった。むしろ差別的なふるまいはブラジルの厳しく階層化した階級構造から起こり、そのことが偶然に人種的な階層に対応していると主張した。

しかし、ブラジルの人種問題のルーツを歴史的にたどってみると、植民地時代も帝政時代も、国家が人種差別を維持し、永続化することに深くかかわってきたと言えよう。若干の混血人が支配階層に組み入れられることが認められたために、後になってブラジルでは人は皮膚の色によって差別されることはないという、いわゆる「人種民主主義」の神話が構築されることになった。しかし現実とは全く異なり、黒人と混血人の大部分はことあるごとに差別が存在した。

ブラジルの人種関係に関する重要な争点の一つが「白人化」である。ヨーロッパ系の移住者の導入や白人ブラジル人の多産、黒人からムラートへ、ムラートから白人のカテゴリーへと吸収される混血家庭の継続などによって、徐々にブラジルの人口が白色化してきた結果、多くの黒人は消えてしまうと主張された事実で

ある。「白人化」のイデオロギーは、ブラジルにおいては常に重要性を帯びた。奴隷制度廃止論者によって進められた 19 世紀的な論法は、黒人が徐々に消えるとともに、奴隷制度の残した人種問題が解決に向かい、国内の道徳的な風潮が高まるといったものであった。皮肉にも「白人化」は逆に人種差別主義の補強に機能したのである。

さらに、これは表面的には民主主義的な風潮の一環として理想的なブラジル人のモデルを求めたジルベルト・フレイレによって、「人種的民主主義」という考えの一環として主張されたのである。彼の主張の全体を貫くものは、白人と黒人、奴隷所有者と奴隷、支配者と被支配者の間の融和、調和のとれた人間関係であり、人種偏見のない人種民主主義の支配するブラジルという社会観であった。

ブラジルの指導者たちがフレイレの言説を容易に受け入れたのは二つの理由がある。第 1 に多くの者が人種的に混交した自意識の強いブラジル人の国民性に浸透した原住民やアフリカ人の影響を正当化し、高貴なものにしたいと願っていたこと、第 2 にブラジルの指導者たちが、融和と同化という慈悲深い国の伝統あるいは目標を、意識的かつ巧みに設定しようと意図した事実である。それをまさに政治的に表現したのが、ヴァルガス時代の「ブラジリダデ」という民族主義運動であった。

ヴァルガス下野後（1945 年以降）、世界恐慌と第 2 次世界大戦をきっかけとして、経済のダイナミズムは輸出農業から輸入代替を目指す工業化へ移行し始める。政府は工業化を推進するために、運輸・動力などの社会的間接資本の充実を経済政策の中心に据えた。政府の進めた工業化政策は産業基盤の整備という面からは評価されたが、1960 年に入ると金融常識を無視した経済政策の悪影響が次第に物価高騰を招いた。この経済低迷・混乱を背景に、クーデターで 1964 年に軍事政権が誕生した。軍事政権ではインフレの抑制を図り、その後に経済再建から積極的な成長政策がとられ、工業生産の伸びを原動力にブラジルは 1970 年代初めに 10% を超える成長を実現する。しかしその発展過程のなかで、①所得分配の不平等、②インフレ率の昂進、③対外債務の累積という問題を抱え、オイルショックをひとつのきっかけに 80 年代の経済危機に直面した。

1985 年に民政移管が実現すると、1988 年憲法が制定された。2003 年に発足するルーラ政権につながる法制度的な準備は、軍政の権威主義に代わる、この民主主義的新憲法により整えられた。制度上は社会格差の是正や社会正義の獲得に配慮した仕組みが完成するが、実際の運用においてはエリート重視の状況が続き、この点においては、新自由主義政策によってハイパーインフレを終息させたブラ

ジル社会民主党 (PSDB) のカルドゾ政権と、格差是正を目指した労働者党 (PT) のルーラ政権の展開に注目しうる。カルドゾ政権では自由競争を容認する経済の開放を掲げ、外国資本を積極的に誘致し、国際競争時代に乗り遅れないブラジルを目指した。北東部の貧農出身のルーラは新ポピュリズムとも呼べる新風を巻き起こし 2002 年の選挙で大統領に選出され、持ち前のカリスマ的要素で高い国民的支持を得た。その基本政策として、政治選択として反新自由主義の「社会正義」を重視しつつ、南米大陸に位置する広大な多民族国家の発展の実現に向けて、ナショナリズムと自由主義的開発をともに重視する現実路線を歩んだ。

第 4 章ではブラジルの人種問題の展望がテーマである。1940 年～ 50 年代の人種問題をテーマとした研究では、アメリカ合衆国との比較で、ブラジルとほかのラテンアメリカの奴隷制社会は比較的温情的で、自由の獲得が容易であったとの主張がなされた。これはイベリア文化とアングロサクソン文化、カトリックと新教といった宗教的な違い、またブラジルでは人種ではなく社会的地位や階級に差別の要因を求めたものであった。

しかし 1960 年～ 70 年代に入ると、そのような言説に批判的な研究が多く現れる。それらは、ブラジルでは白人に比べて非白人のブラジル人がひどく不利な状況にあることを明らかとし、ブラジルの社会学者フロレスタン・フェルナンデスはブラジルの人種民主主義神話を否定した。ただしアメリカ合衆国で「白人と黒人」という二つの人種カテゴリーしか存在していないのに対して、ラテンアメリカでは「白人、黒人、ムラート」という 3 つの公的なカテゴリーが存在し、この混血人が主としてヨーロッパ人の血統を引き継ぐ場合に白人が占める社会的地位に統合されることを望むことができたとした。

1980 年～ 90 年代以降も、人種に基づいた差別が、労働市場における搾取と競争において重要な役割を果たしているのではないかという可能性が注目された。ハゼンバーグとシルヴァは、政府の統計資料を綿密に検証し、人種を階級問題のなかに埋没させるアプローチを不適切とし、黒人と混血人が同質で資本主義的な「アフリカ系ブラジル人」グループを構成している主張は現実に矛盾しない結果を示した。またアメリカ合衆国の歴史学者アンドリュースは、ブラジルでもアメリカと同じように、さほど明白ではなく厳しくもない形の人種の階層制度が、法的な拘束なしに維持されてきたことを主張した。

人種問題の研究をみると、アメリカ合衆国、南アフリカ、ブラジルの 3 つの社会で人種関係が競争的になったが、そのなかでブラジルは最も温和な例であっ

たと考えられる。ただし歴史的に見れば、人種差別は法律制度によって認められず、非人種差別的な立場をとる国家の方針で否定されたが、現実には社会慣行の形で存続した。差別と不平等な処遇の慣行は、現在でもなお、社会的な関係における規範として機能し続けている。

非白人と白人の平均所得を比較すると、皮膚の色の相違によって、貧困という物質的な窮乏状態に追い込まれる可能性と強く結びついている。過去の数値と現在を比較しても、非白人と白人の間での所得格差は依然として大きい。また地域格差という観点でも、非白人の人口割合の高い北東部と白人の比率の高い南東部を比較すれば、北東部の貧困が際立つ。このような格差問題に取り組むうえで重要なのは、教育における人種差別の是正策である。黒人と混血人は同じ社会・経済的階層出身の白人よりも一貫して低い教育水準にあり、職業と所得の水準についても、教育の及ぼす影響が白人に対して黒人と混血人よりも有利に作用している。つまり、教育面からの影響においても、彼らは人種的な原因に結び付いた不利な状況にさらされていることを示唆している。

3. 論評

社会的・経済的格差の存在は、ブラジルの発展を考察するうえで常に議論の中心となるテーマである。ルーラ政権以降、社会政策を充実させ貧困撲滅に取り組みむと同時に、経済成長を実現したことで、国際的には新興国群 BRICS の地位をブラジルは得てきた。その過程で、社会的・経済的格差の問題は改善に向かっているようには見えたものの、その本質は大きく変わっていないと本書は指摘している。特に人種という切り口での分析は、近年見られた「新しいブラジル」という議論のなかでは、評者の知る限り取り上げられることの少ないテーマと思われる。もっとも「新しいブラジル」とは、「明暗」という意味では近年の発展で表出したブラジルの「明」を映し出すものである一方、本書はその根底部分にある「暗」に視線を投じたものと評者は感じた。

評者が本書評を執筆している8月に、リオデジャネイロ市でオリンピックが開催された。そこで活躍する選手を見ると、非白人の存在感に改めて気づかされる。例えば柔道女子57キロ級で金メダルをとったラファエラ・シルバ選手はリオのファヴェーラ出身の柔道家（ブラジルでも「JUDOCA」と表記される）である。カヌー競技で銀2つ、銅1つの合計3つのメダルを獲得したイザキアス・ケイロース選手も、本書で貧困地域として挙げられる北東部出身だ。団体競技で

も悲願の金メダルを獲得した男子サッカー、男子バレーボールの選手を見てもその多くが非白人であることに気が付く。オリンピックという華やかな舞台で活躍する選手をみると、フレイレらが唱えてきた、人種偏見のない人種民主主義の支配するブラジルという社会観に感化されがちである。しかし彼らが育ってきた環境をつぶさに見れば必ずしも恵まれたものではなく、その点においてブラジル社会に深く根差した人種問題が依然として横たわっていることを本書は示唆しているように思う。

なお、本書は3人の共著者が個々の専門分野に応じて執筆している。それぞれ力作で読み応えがあるものの、一冊の本として読み進める上では若干の違和感が残る部分があった。具体的には歴史解説が中心の第1章および第3章のなかで、人種問題のみに焦点を充てた項目があり、同じ章として読み進める上では読者側に頭の切り替えが必要と思われた。また第3章の2. 4) で軍事政権後の時代の政治動向をテーマとしているが、直前の3) の軍事政権時代は経済運営がテーマとなっている。ここは時代ごとに焦点を変えた筆者側の意図が明示されるとよかったと思われる。

ただし評者が感じた構成上の問題は、無論個々の執筆者の研究価値を損なうものではない。むしろ現代ブラジルに接するなかで見落としがちな、歴史に根差したブラジル社会の本質的な問題、すなわち「暗」の部分を変えて気づかせてくれる点が本書の最大の功績であろう。さらに望むとすれば、この歴史を踏まえて今後のブラジルの展望をどのようにとらえるのか、今後各執筆者の見解に何かしらの形で触れられる機会があることを期待したい。

以上